

研 究 者 か ら の メ ッ セ ー ジ

研 究

— けんきゅうびより —

日 和

Vol.
02

特集

理系女性研究者 Part 2

研究は楽しい。

膨大な文献をひも解き、数えきれないほど実験を繰り返す。

それまでわからなかったことを解き明かす感動、

そしてその先に、世界を変える、未来をつくる喜びがある。

ここにあるのは、

「なぜ?」「好き」をとことん追究する、

そんなワクワクすることを一生の仕事にした先輩たちの物語。

その一つひとつが、あなたの未来を照らす道しるべになることを願って

輝き続ける研究者たちの言葉を贈ります。

P.02



Case #01

誰も解明していないことを
解き明かす醍醐味

渡辺 圭子
理工学部 機械工学科 教授

P.04



Case #02

「なぜ細胞は動くのか」
好奇心が研究の原動力

河野 貴子
薬学部 薬学科 准教授

P.06



Case #03

マイクロスケールの世界で
最先端を走る

安藤 妙子
理工学部 機械工学科 准教授

P.08



Case #04

性別、年齢は関係ない
研究成果を出し続けることが大切

西原 陽子
情報理工学部 情報理工学科 准教授

P.10

ごあいさつ

田中 弘美
立命館大学 副学長
男女共同参画推進リサーチライフサポート室 室長

P.12

活動紹介

コラム

男女共同参画推進リサーチライフサポート室 事務局

誰も解明して いないことを 解き明かす 醍醐味

渡辺 圭子

理工学部 機械工学科 教授

Profile

1998年、大阪大学大学院工学研究科修士課程を修了後、三菱電機（株）に入社。人工衛星の製造技術開発に従事する。2002年、東北大学大学院工学研究科博士課程に入学し、2005年、博士号を取得。九州工業大学宇宙環境技術研究センターの博士研究員を経て、2006年、立命館大学理工学部助手に。その後、大阪大学大学院基礎工学研究科助教として4年間勤め、2011年から現職。

企業を経て 研究者の道へ

もともと航空・宇宙分野を勉強したいと思い、大学に入学。4回生で配属された研究室が、当時まだあまり知られていなかった宇宙ゴミ（スペースデブリ）を扱っており、「おもしろいな」と思ったのが、現在の研究との出会いでした。スペースデブリとは、地球の軌道にある不要な人工物体のことで、具体的には使用済みあるいは故障した人工衛星、打ち上げロケットの上段、ミッション遂行中に放出した部品、爆発・衝突し発生した破片などのことを指します。これらは（低軌道の場合）およそ秒速7 kmの速度で周回しています。私に関心を抱いたのは、そうした超高速で飛行する物体の衝突現象。人工衛星などにぶつかれば、致命的な損傷を与えかねないことから、近年注目が集まっていますが、私がスペースデブリの研究に携わり始めた頃はほとんど手つかずの研究テーマでした。

とはいえ最初から研究者を志したわけではありませんでした。修士課程を修了後、一度は企業に就職し、人工衛星を作るための製造技術の開発に携わりました。念願の宇宙に関わる仕事でしたが、忙しい日々の中、次第に物足り



なさを感じるように。企業での研究は、開発目標や予算が決められており、目標の値を出せば、開発の役割は終わります。「もっと追究すればどうなるのか」「なぜ、こうした現象が起きるのか」。そんな疑問を解明することはできません。

やがて「もっと疑問を突き詰めたい」との思いが膨らみ、退職を決意。大学の博士課程に入り直し、研究者としての道を歩み始めました。

「おもしろい」が 研究の原動力

現在は、物体が高速で衝突した時に発生する衝撃や破壊などの現象を研究しています。ふつつ自動車や衝突する時のスピードは、秒速数十メートル程度。それに対して秒速1 kmを超えるような高速の衝突では、低速衝突では見られないような特異な現象を引き起こします。ところが衝突は一瞬のできごとのため、計測するのが極めて難しい。どうすれば衝突の際に起こるさまざまな現象を捉えることができるのか。計測方法の開発から行い、誰も計測したことのない現象を解き明かすことが醍醐味です。

今挑戦している研究の一つが、衝突の際に発生する温度を計ること。物体が超高速でぶつかった瞬間、衝突点は高温・高圧となり、電離気体であるプラズマが発生します。このプラズマを計測することにより、衝突点付近の温度を算出しようというのが私たちの試みです。スペースデブリが衝突した時に物体がどれぐらいの温度に達するのかは、NASAをはじめ宇宙業界の人の多くが関心を持っていますが、これまで誰も計測に成功していません。そんなNASAにも解らない現象を捉えることができたらと思うと、胸が躍ります。

「おもしろい」ことが、研究の原動力。これまで誰にも解明できていない謎を解き明かしたい。そんな純粋な好奇心に突き動かされています。

自由に、 臆せず追求してほしい

衝撃の研究には大型の専用の装置が必要になります。特に秒速1 kmを超えるスピードを再現できる装置は国内でも限られた大学や研究機関にしかなく、これまで研究環境を求めて東北から九州まで渡り歩いてきました。それだけ身軽に、自由にキャリアを築けたのは、若さと女性であることが強みになったと私は思っています。

研究においても、必ずしも同じテーマを追いつけてきたわけではありません。修士課程では材料力学、博士課程では流体力学を専門とする研究室に所属しました。その都度一から勉強するのは大変でしたが、複数の分野の知識を身につけたことが、今では財産になっています。構造や材料の研究に、圧縮性流体の分野で利用される計測方法を利用するなど、他の研究者が思いつかない発想でユニークな手法を考え出せるのも、複数の専門分野を学んだからこそです。また最近、学術界はもちろん、産業界でも分野横断や異分野融合が当たり前になっており、一つの専門分野だけに偏らない複合的な知識や、異分野の研究を理解し、連携する力が求められています。私自身も異分野の研究者と連携し、共同研究することが少なくありません。これから研究者を目指す人にも壁を作らず、おもしろいと思ったことを臆せず追求してほしい。その一つひとつが必ず自身の成長の糧になるはずです。

「なぜ細胞は動くのか」 好奇心が研究の原動力

河野 貴子

薬学部 薬学科 准教授

Profile

京都薬科大学を卒業後、奈良先端科学技術大学院大学/バイオサイエンス研究科博士前期・後期課程を修了。細胞機能の制御分子メカニズムについて研究する。2004年、名古屋大学大学院医学研究科21世紀COE研究員となった後、奈良先端科学技術大学院大学、奈良女子大学などで研究に従事。2010年に立命館大学総合理工学院、薬学部の助教となり、2015年より現職。

細胞が動く様を 見た感動が原点

「細胞は生きている!」。初めて細胞が動く様子の動画を見た時の胸が震えるような感動が、研究者としての私の原点です。

「細胞生物学の研究者になろう」と心に決めたのは、大学3年生の時。小学生の時にマリー・キュリーの伝記を読んで科学者に憧れを抱いていたものの、正直に言って植物の成長を観察するような理科の生物の授業はあまり好きではありませんでした。それが一変したのは、中学生になってから。利根川進先生がノーベル賞を受賞されたことから、生命の仕組みを分子レベルで解き明かす分子生物学という学問があることを知り、初めて「生物

学っておもしろそう」と興味がわきました。

とはいえ大学3年生になっても具体的にどんな研究をしたいのか、まだ決めかねていました。興味を持った大学の研究者の先生に片っ端から連絡し、研究室を訪ねたり、お話を伺う中で出会ったのが、今日まで恩師と仰ぐことになる貝淵弘三先生です。当時奈良先端科学技術大学院大学で教鞭を取っておられた先生のもとで培養細胞が動くライブ映像を見たことが、研究者としての道を決定づけることに。「なぜ細胞は動くのか。メカニズムを知りたい」。その時に抱いた好奇心が、今も研究の原動力になっています。

もう一人、研究者になる上での道しるべとなってくださったのが、現・立命館大学の上席研究員である川寄敏祐先生です。「次に選ぶ

研究室が研究者としてのあなたの人生を決めることになる。だから本当に研究したい専門分野を真剣に考えなさい」とアドバイスしてくださったおかげで、大学院から一貫して同じ関心を追い続けることができました。

結婚・出産を経て 理論研究も導入

まるで意思を持っているかのように動いたり、形を変えたり、分裂したりするのが細胞の不思議なところ。こうした細胞機能を実現するために細胞内ではたくさんの分子が絶妙なタイミング、適切な場所でうまくはたらくよう制御されています。脳のような中枢機能を持たない単細胞にどうしてそんな統合的で

調和した制御が可能なのか、はっきりとはわかっていません。私はさまざまな細胞機能の制御原理を調べることで、細胞内に調和したリズムやパターンが生まれるメカニズムを解明しようとしています。

修士・博士課程を通じて実験による研究が中心でしたが、結婚・出産を経て長時間研究室に籠り切りで実験に没頭することが難しくなったのを機に、思い切って取り入れたのが理論研究です。まだまだ勉強中ですが、数理生物学の理論を導入し、コンピュータシミュレーションなどによって細胞内の分子が空間的にどのようなパターンで活性するかを予測し、それを実験によって実証しています。理論と実験の両方を組み合わせて、細胞機能の制御原理を明らかにしたいと思い研究を続けて

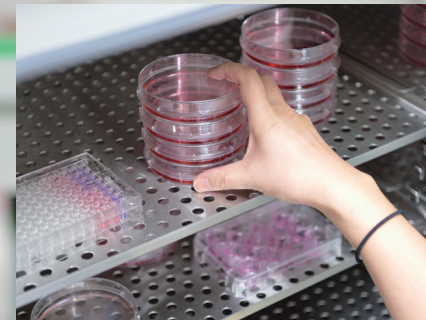
います。ライフイベントがチャンスのきっかけになることもあります。どんなことにもチャンスがあるかもしれないと考えることが、研究者としてのキャリアを続けていく上では大切なのかなと思っています。

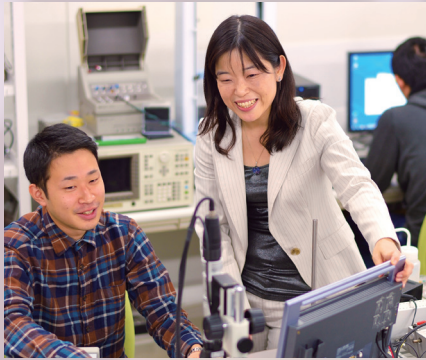
「生命」の謎を 解き明かしたい

いつも心に留めているのが、恩師である貝淵先生にいただいた「良い研究をきなさい」という言葉です。先生のおっしゃる「良い研究」とは、「教科書に載るような研究」、すなわちこれまで誰も知らなかったことを解明したり、生物に対する認識を変えるような事実を発見することだと思っています。細胞のはた

らきのメカニズムがわかれば、その破綻の結果である病気の予防法や治療法を見出すことも可能になります。お医者さんではないので、直接患者さんの病気を治すことはできないけれど、基礎研究の成果が疾患の治療や予防に応用されて役立てば嬉しい。何より「生命とは何か」という人類がまだ解明できない大きな問いの答えに一歩でも近づきたいと思い、研究しています。

研究者としてはまだまだ「若手」と思っています。今でも大きな夢を描き、追いかけられるのが楽しいですね。もっと若い皆さんには無限の可能性が広がっています。かつて多くの先生方が情熱を持って導いてくださったように、私も自分の夢を追いつつ、若い後輩たちの助けになれることがあればと思っています。





最先端の研究に触れて 進学を決意

研究者に漠然とした憧れを持ったのは、中学生の頃。高校時代は理系科目より文系科目の方が得意で、どちらを選ぶか悩みました。結局理系コースに進んだのも、「文系科目は得意だから、嫌になったらいつでも文系に変わればいい」という軽い気持ちからでした。

そのまま大学は工学部航空学科に進学。4回生で研究室に配属された時、博士課程で研究する先輩を見て、「私もいずれは博士号を取りたい」と夢を膨らませたものの、当初は「修士課程を終えたらまずは就職しよう」「博士号に挑戦するのはずっと後でいい」と考えていました。ところが修士課程で、MEMS (Micro Electro Mechanical Systems) と呼ばれるマイクロマシンの研究を始めたことで、思い描いた進路を大きく変えることになったのです。

1mmの1000分の1、マイクロメートルサイズの超小型機械システムであるMEMSは、いまやスマートフォンなどの小型の電子機器に欠かせないものとなっています。当時世界が技術革新にしのぎを削っていた最先端の分野に触れた私は、すっかり引き込まれてしまいました。

決定打になったのは、修士課程2回生の時。指導教授についてアメリカ・シカゴで行われた国際学会“Transducers”に出席したことでした。MEMS関係では世界最大規模の学会で、世界中の研究者が一堂に会し、MEMSが使われているセンサーやアクチュエータについて最新の研究成果を発表します。最先端の研究を間近で見て、気鋭の研究者たちの話を聞いてワクワクしました。「いつか私もこうした人たちと肩を並べて研究したい」。そんな思いが高まり、帰国後すぐに両親に「博士課程に進学したい」とお願いしたことを覚えています。

MEMSに使われる 材料の特性を研究

研究テーマは、MEMSに使われる材料の機械的な特性を評価すること。極小でしかも電氣的に駆動させるのに適した素材を検討するとともに、どのくらいの力を加えると壊れるか、あるいはどのように壊れるかを検証しています。

現在は、MEMSの材料として多く使われている単結晶シリコンについてさまざまな強度試験を行っています。通常目に見えるサイズのシリコンは少しの刺激で割れてしまう脆いものですが、マイクロスケールになると非常に高い強度を示します。しかしマイクロスケールの物質を測定するのは、口で言うほど簡単ではありません。最初は単結晶シリコンの片方を引っ張り、電子顕微鏡の超高倍率画面で像を見ながらどのくらいの負荷まで耐えられるか検討しようとしたのですが、うまくいきませんでした。片方の端をわずかに引っ張るだけ

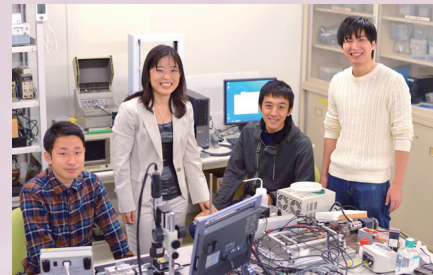
で観察しているところが電子顕微鏡の視界から外れてしまい、測定できないのです。そこでシリコンの両側を引っ張って、左右均等に負荷をかける構造を独自に作り、強度の検証に成功しました。

同じ物質でも極小サイズになることで、強度や粘性、温度などの特性が大きく変わるのが、研究していておもしろいところです。誰にも知られていなかった新しい現象を発見した時は、それまでの苦勞が吹き飛びますね。

好きだから 苦勞も乗り越えられる

研究は思い通りに進まないことばかりです。そもそも測定する方法がわからなかったりしますし、時間をかけてやっとのことで測定したものの、期待した結果を得られず、それまでのすべてが徒勞に終わることもあります。そうした試行錯誤の過程が長い分だけ、結果が出た時の喜びは大きいですね。

だからこそ研究者を目指す皆さんには、「好き」という気持ちを大切にしてほしい。「研究が好き」「新しいことを解明するのが喜び」と思えるからこそ地道で長いプロセスを乗り越えられるのです。結果を恐れず、それぞれに自分の好きな道を目指してほしいと願っています。



Profile

1996年、名古屋大学工学部卒業。2001年、名古屋大学大学院工学研究科マイクロシステム工学専攻で博士課程を修了。MEMS研究に従事する。同年、日本学術振興会特別研究員となるとともに、名古屋大学大学院工学研究科助手に就任。さらに助教、講師を経て、2009年より立命館大学理工学部准教授。

Case #03

マイクロ スケールの 世界で 最先端を走る

安藤 妙子

理工学部 機械工学科 准教授

最先端のITに 興味を惹かれて

「研究者になろう」と最初に意識したのは高校生の時です。仲の良い友達が「NASAの研究者になる」と言うのを聞いて、「じゃあ、私も」と、そんな軽い気持ちでした。研究者が実際にどんなことをするのか、当時は何も知りませんでしたが、結局この決断が、理系選択や大学進学、そして今につながっているから不思議です。

大学4回生の時、卒業論文を書くにあたって研究室を一つひとつ回り、興味を引かれたのが、コンピュータによる言語処理の分野でした。AI(人工知能)について研究しているのを見て「おもしろそう」と思ったことが、現在の研究との出会いでした。

大学院修士・博士課程、そしてポストドクターとして大学に残った1年間は、自分の研究に思う存分打ち込んだ時期です。研究がおもしろかったことはもちろんですが、研究を続けるために結婚や出産といったライフイベントの前に確かな職を得ておきたいという気持ちもありました。就職が難しいといわれる大学教員のポストを得るには、多くの論文を発表する必要があります。専門誌や学会誌などに論文を投稿すると、さまざまな疑義や時には厳しい批評が寄せられます。それに対して誤解を解き、ロジックを通すことができて初めて研究者といえるのではないかと私は考えています。さまざまな研究テーマに挑み、できるだけ多くの成果発表をしたことで今のポジションがあると考えています。

「何でもアリ」が おもしろい

研究のおもしろい点は、大雑把に言えば「何でもアリ」なところだと思います。企業に就職したら、恐らくトップの方針に沿った仕事に取り組まなければなりません。それに対して大学での研究は、自分の関心のままに追求することができます。私自身が一番楽しいのは、自分のアイデアや実験結果を発表する瞬間です。それを実感したのは、初めて学会で発表した修士



課程1回生の時でした。多くの聴講者の先生方が年若い私の研究発表に耳を傾け、質問や批評を投げかけてくださるのがとても嬉しくて、研究意欲に火がついたことを今でも覚えています。

現在はテキストマイニングを用いて言語データを分析し、さまざまなことに役立つシステムの構築に取り組んでいます。テキストマイニングとは、大雑把に言えば単語や文章の集まりから言語解析によってキーワードを抽

出し、それらの関係性を抽出する分析手法です。例えば、ツイッターなどのSNSに書き込まれた商品への不満などの情報をテキストマイニングの手法を使って抽出、分析し、店舗の宣伝やマーケティングに生かすためのシステムを構築したのも成果の一つです。

またテキストマイニングを外国人留学生向けの教育ツールに活用する研究も進めています。日本に来る留学生の多くがマンガやアニメを通じて日本語を習得していることを知って、「これらを教育ツールに使えないか」と思ったのが研究のきっかけです。マンガと言っても、高校生を主人公にした青春ものや多様な職業をテーマにしたものなどジャンルは多岐にわたります。例えば小学生がサラリーマンを主人公にしたマンガを読んでもあまり日本語学習の助けにはなりません。そこで、数多くのマンガのセリフを抽出、分析し、各対象者にとって最適なマンガを自動的に選出するシステムを構築中です。

キャリアとしても すばらしい職業

これから研究者を目指す若い女性には、「ちゃんと稼ぐことができる職業ですよ」と伝えたいです。もちろん研究者として一人前になるまでは、大変なこともあります。けれど、論文や研究成果は、性別や年齢などの属性に関係なく評価され、研究職につけば生きて行くには十分な収入を得ることができます。研究が好きであることが大前提ですが、キャリアの一つとしても研究職はやりがいのある仕事だと思っています。

Case #04

性別、年齢は関係ない 研究成果を 出し続けることが大切

西原 陽子

情報理工学部 情報理工学科 准教授



Profile

2003年、大阪大学基礎工学部を卒業後、同大学大学院基礎工学研究科で博士課程を修了。AI(人工知能)の一分野にもなっている言語処理を研究する。2008年、東京大学大学院助教に就任。同大学講師を経て、2012年、立命館大学情報理工学部准教授に就任。

未来の世界をつくる可能性に 満ちた研究者を育てたい



田中 弘美

立命館大学 副学長

男女共同参画推進リサーチライフサポート室 室長

自分が興味を持ったことを研究テーマとして徹底的に追究できるのが、大学の研究者になる魅力です。自らが解き明かしたことが、数年後、あるいは数十年後、新たな技術や産業の創出につながったり、人々の生活や文化をより豊かなものにしたりする。そうした未踏の領域を最初に切り開いていくチャンスを与えられている、とても幸福な仕事だともいえます。

言い換えれば、私たち研究者が未来の科学技術の発展、ひいては産業や経済、社会の礎を築いているともいえるでしょう。それだけに研究者の育成や研究しやすい環境をつくることは、極めて重要だと考えています。

専門性を究めていく道は、決して平たんではありません。大学で確かな知識の基盤を培い、探究心と向上心をもって地道な研鑽を続けていく必要があります。そうした長い道のりを経て一人の研究者が育つまでには、本人の志やたゆまぬ努力はもちろんですが、生活を支える親御さんや保護者の方々、指導する教員、あるいはサポートする国や大学など、物心両面で実に多くの愛情や支援、教育という名の投資がかけられています。そうして育んだ研究者の芽を簡単に摘み取るわけにはいかない。大学にもそうした強い思いがあります。そのため立命館大学では、研究者がいきいきと自分らしく研究に集中できるよう、組織や体制づくり、環境整備に着手しています。

例えば女性の研究者が結婚・出産といったライフイベントを経験しながら研究を続ける上では、さまざまな困難にぶつかります。女性特有のライフイベントだけ

でなく、大多数を男性が占める研究環境で、生きづらさや働きづらさを感じることもあるかもしれません。そうした課題を克服し、性別や年齢、国籍などあらゆる属性に関係なく、誰もが自分の力を最大限発揮できる環境をつくらなければ、日本、そして世界の未来は拓けないと考えています。

大学の研究者は、自ら研究するだけでなく、教員として「人を育てる」役割も担います。どれほど優秀でも一人で生み出すことのできる研究成果は限られています。それまで獲得してきた知見や研究の蓄積を学生や若手研究者に伝えることで、研究成果が未来に実りのある形で引き継がれていく。それもまた喜びです。

とりわけこれからは、一つの狭い専門領域だけでは地球規模で起こる問題や現代の複雑で複合的な課題を解決することはできません。次代を担う研究者には、幅広い研究分野に知見を持ち、多様な研究者と連携することが求められます。これから研究者を目指す皆さんにはぜひ、多様な分野に「知」を広げてほしい。未来をつくる革新的な研究に取り組む可能性に満ちた皆さんをお待ちしています。

Profile

1975年、お茶の水女子大学を卒業後、富士通（株）で3年間勤務。1981年、アメリカ・ロチェスター大学大学院マスターコースを修了後、大阪大学大学院博士課程に進学し、1988年に工学博士号を取得。（株）国際電気通信基礎研究所勤務を経て、1994年、立命館大学理工学部教授に就任。2004年より同大学情報理工学部教授。専門はコンピュータビジョンやバーチャルリアリティ。2016年より新設された男女共同参画推進リサーチライフサポート室で女性研究者支援に尽力。

男女共同参画推進 リサーチライフサポート室の活動紹介

男女共同参画推進リサーチライフサポート室は、男女共同参画推進委員会と協同し、ダイバーシティ研究環境整備を推進しています。

1. 意識改革と情報発信

● 各種シンポジウム・セミナーの開催

「多様性から創造性とイノベーションを創出する大学づくり～女性研究者が活躍できる研究環境の実現～」、「Beyond the Bias and Barriers ～女性活躍推進のこれからを考える～」等、多様なテーマで意識啓発のためのイベントを開催しています。



● 広報誌「News Letter」、リーフレットの発行、ホームページの作成



コラム

ダイバーシティ 支援事業の立ち上げと 今後の展開

男女共同参画推進
リサーチライフサポート室
事務局

2016年7月、本学は文部科学省が日本の女性研究者数を増加するべく立ち上げた科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に採択されました。

採択当初、本学の女性研究者支援はようやく着手されたばかりで、支援体制の整備に多くの課題を抱えていましたが、2016年12月、吉田学長による「立命館大学男女共同参画宣言」を皮切りに、「男女共同参画基本方針」や「行動計画」の発表、「男女共同参画委員会」や「男女共同参画推進リサーチライフサポート室」などの体制づくり、具体的な施策の実施、意識改革活動、情報発信活動など、学長のリー

2. 教育・研究の推進と研究力の向上

● 研究支援員制度の整備

出産・育児・介護等のライフイベントと研究活動を両立できるよう、研究継続のために雇用する「研究支援員」の雇用経費を助成する制度を整えています。

● 科研費特別講演会の開催

● 学術英語論文のための 基礎講習会の実施

ダーシップのもと急ピッチで女性研究者の研究環境整備を進めて参りました。

こうした取組みから、学内外で多くの女性研究者の方々と直接お会いし、女性研究者ならではの困難、女性が働くことへの社会の無理解や不寛容を多く見聞きし、これらの声に耳を傾け、ニーズを拾い、寄り添う支援環境づくりを進めることの重要性をひしひしと感じています。

とはいえ、わずか1年あまりの期間ではあるものの、女性研究者支援に対する学内の意識は徐々に変化しているとも感じています。教員採用にあたり「女性限定人事」が行われ、学内保育所設置に向けた

3. 教育・研究と家庭の両立支援

● 臨時託児室の設置

● ベビーシッター・ホームヘルパー利用の 費用補助

4. 女性研究者の採用・上位職登用

● 女性研究者の在職比率向上

● 新任教員サポート

本学着任後、研究をスムーズに開始できるようコンシェルジュサービスや理工系女性メンター制度等を整備しています。

ワーキンググループが立ちあがり「企業主導型保育支援事業」に申請するなど、全学をあげて女性研究者支援の機運は高まっています。地道な取組みであっても継続していくことが効果をもたらすのだと実感しています。

今後の課題は、大学という組織のすみずみまで男女共同参画推進リサーチライフサポート室の取組みをご理解いただき、教職員だけでなく学生や研究員まで、広く支援体制を作ることだと考えています。さらには、性的マイノリティや外国人など本来の意味でのダイバーシティ支援も、女性支援の次に着手すべきこととして認識しています。

5. 女性研究者の裾野拡大

● 交流の場「立命研究者の会」

学部や学科、キャンパスを越えた研究交流の機会へとつながることを目標としたイベントを開催しています。



● 学内セミナー

本学所属研究者の研究発表およびフリーディスカッションを行うセミナーにて、女性研究者の発表月間を設けています。



単に福利厚生としての女性支援ではなく、多様性から創造性とイノベーションを生み出し、教職員が最大限に力を発揮することで、本学の教育力と研究力を向上させることを最大の目標にして、今後も取組みを進めて参りたいと思います。今後も、本学のダイバーシティ環境実現に向け、皆様の様々な声をお聞かせ下さい。

